

青島における茶芸教育の導入と受容

劉 偉¹

要旨

現代中国では、茶文化の発展とともに茶芸師という職業が広く認識されている。青島の都市住民にとって茶芸を習う目的は、資格取得、趣味、教養として変化してきた。茶芸師資格の取得に対する彼らの認識からみると、中国の急速な経済発展により、人々の日常生活が豊かになったことを背景に、茶芸を習うことは物質的な需要から精神的な需要を満たすことへ変化した。

キーワード：茶芸教育、茶芸師、趣味、教養

I. はじめに

現代中国茶文化を考える上で、茶芸という概念は極めて重要だと言える。しかし、それは改革開放以降に台湾から伝播された概念である。王俊暉は「茶芸は常に中華伝統文化と表現されているが、実は、茶芸師という新興の職業と新たな様式の飲茶場所-茶芸館、飲茶空間の出現による新たな現象である」^[1]と述べている。また、王静も中華の伝統における正統として構築された茶芸は、ただちに台湾社会で大きく発展したというわけではなかったとし、新たな経営形態の「茶芸館」が次々に作られる中で、1980年代の後半になると台湾社会にすっかり浸透したと述べている。

茶芸は台湾で受け入れられると同時に、アジア茶文化圏の国や地域へと伝わっていった。王静は「やがて茶の祖国である中国への逆輸出を果たし、1980年代によみがえりつつあった中国の茶文化と向き合うこととなった」^[2]と指摘する。中国では、茶文化の発展とともに茶芸という概念が広い範囲で認識されるよ

うになり、それとともに、「1999年に茶芸師は一つの職業になった」^[3]という。

本稿における茶芸とは、80年代から台湾から伝来し、大陸で発展した新たな概念である茶芸を指しており、それと関わる人々が考察対象となる。本稿では、青島市をフィールドに、新たな概念である茶芸、茶芸師という職業について、特に茶芸の習う側、教える側の双方から考察したものである。そして、茶芸を習うことはどのような意味を有しているのか、特にどのようなかたちで都市社会と結びついているのかという点について明らかにする。茶芸師という概念はまだ新しく^[4]、研究資料が少ないために、本稿では筆者が2015年から2019年の間に青島市において行ったフィールドワークに基づきながら論じる。

II. 茶芸という概念の導入と発展

「茶芸」という語は、1977年に中国民俗学会の理事長である姜子匡などの研究者が日本茶道と区別するために作ったとされる^[5]。「80年代以来、台湾の経済発展により、茶芸が盛

んになってきた。台湾の功夫茶芸は伝統的な功夫茶の理念に基づいて受け継いだものである。さらに多くの流派が生まれた」^[6]という。そして香港、中国に広がった。最初に台湾で茶芸という語が使われたのは、70年代中期に、管寿齡が台北で経営していた芸術品の店からである。その名前は「茶芸館」といい、管寿齡は以下のように説明した。つまり、「芸術品は高いものであり、来客がゆっくり考えてから買うものであるため、ゆっくり考えさせる間に、茶を提供することになった。その空間は芸術品プラス茶イコール茶芸館と名付けた。これが『茶芸館』の起源である」^[7]と述べた。いわば、管寿齡により「茶芸館」の芸は「芸術品」とされたのである。

茶芸という概念は、新たに台湾で創造された概念であり、「もともと中国では、茶文化として理解され、茶を飲むことが民俗的習慣として普及した。それを『茶道』と呼んでいた。しかし、『茶道』は現在日本で茶文化の専門用語として使われているし、同じような言葉を使ったら、日本の茶道を台湾に輸入したと誤解が生じると主張する人がいるため、中国では『茶芸』と呼ぶに至ったのである。また中国人にとって『道』という漢字は重い言葉であり、理解する際には高い文化教養が必要だと考えるため、一般の民衆に受け入れられるのは難しいことであり、『茶道』はあまり適当な概念ではなかった。そのために『茶芸』という言葉を使用するようになったのである」^[8]という。

ところで季野は、茶芸は「茶を主体として芸術的な生活様式を日常生活に溶けこませるための一つの方法であり、その目的は茶を生活に融合することである」^[9]と述べている。また、「泡茶（茶を入れること）と飲茶技芸（茶の滋味を味わうことと茶葉のよしあしを鑑賞すること）」^[10]のことを指すといわれる。さらに、茶芸は「茶器で中国茶を淹れて飲ま

せる技法を指すもので、日本の茶道や韓国の茶礼に対応する言葉であり、茶の種類（竜井茶・その他の緑茶・ウーロン茶・紅茶・プーアル茶・花茶）、各地区（杭州・福建・北京・上海・台湾）によって、様々な流儀が存在する。1970年代末、茶芸館と茶芸復興運動が台湾を中心に起こり、『茶芸館』で『茶芸』を行なって中国茶を淹れて飲ませる中国風の純喫茶店がみられるようになった」^[11]のだという。

ところで、朱紅纓は「茶芸は、茶を入れる過程により、茶、水、器、火、境などの要素を儀式化し、それ以外の一般的な飲茶活動と区別されるものである」^[12]と解釈した。そして、周本南、範増平はそれを「広義的には、茶葉の生産、製造、経営、飲用の方法と、茶業原理、原則であり、物質と精神を全面的に満たすことができる学問である。狭義的には、美味しく茶を入れる技芸の研究と茶を楽しむ技術のことである」^[13]と解釈した。さらに王鈴は、「茶芸と茶精神は茶文化の核心であり、その『芸』は製茶、烹茶、品茶などの茶の術であり、『道』とは製茶、烹茶、品茶などの芸茶の過程とつながる精神である」^[14]と述べる。

しかし、茶芸という概念は、研究者がそれぞれの定義をしても、実践者を無視しては意味をなさないであろう。筆者の青島での調査でも、青島市民は茶芸と茶道は混乱している状況であるといえる。また、孟祥梅も同様の指摘しており、「現在、中国の茶文化に関する専門用語は混乱状態にある。各々が個人を主張し、統一的な見解はまだ形成されない。茶界でも茶芸、茶道と茶徳を同義に論じている者が多くおり、茶道と茶芸もはっきり区別しない」^[15]という。

現実には、茶芸を習いに行き、試験に合格したら茶芸師という国家資格証明書を取得できる。茶芸教育の内容は茶を淹れることが中

心であり、その内容から考えれば茶芸とは茶を淹れることを指している。しかし、学校の名称や教育内容には、茶芸ではなく茶道の語がよく使われる。例えば、「緑野仙踪茶道」、「東海三飲茶道培訓」、「国芸茶道」などの学校名である。それに関して学校の責任者は「『茶道』という言葉を使うのは、自分はただ茶を淹れることを教えるのではなく、茶芸を教えることを通じて心身ともに鍛えるということを強調している」と述べている。そして、学校の方は「茶芸」の語を避けていることが多い。

そして、長年茶芸師を教える先生は、「現在の中国茶文化には茶芸という概念が足りないと感じる。それは『茶芸』という概念は中国茶文化の精神を含んでいないからである茶芸よりも飲茶の過程とつながり精神的にも関わる茶道の方がふさわしい」という。

つまり、茶文化の発展により、茶芸という概念では現代中国茶文化をうまく表現できないため、他の概念を使い始めた。その中で「茶道」という概念がよく使われるようになった。茶芸師を養成する学校では、茶道という概念を重視し、教育内容にも茶芸師が明記される。茶芸を教えている先生たちは、「茶道」という言葉が好まれるのが、「芸」と「道」の概念は異なると考えている。邹先生は「『芸』という言葉は中国茶文化の悠久の歴史を表すことができない、私たちが教える内容はただ茶を淹れる（芸術）ことではなく、精神的な面（思想）を含めている」と主張した。つまり、茶道の語が使われるのは、「中国では古くから茶が飲用され、茶を飲用する際に精神性を追求してきた」と強調したいからである。茶芸の先生たちは、茶芸は現代に生まれた新たな「文化」ではなく、古くから受け継いできた伝統文化であると考えている。

1. 台湾における茶芸発展の背景

台湾茶文化の発展に関して、範増平、余舜徳と王静の研究を参考にしながら、以下のような背景に注目したい。台湾茶文化の発展は、その社会変革の背景と関わる。王静は「新しい伝統としての台湾茶芸創出の背景となったのは、台湾社会が経験した経済および文化意識の双方における変化である」^[16]と述べている。それは「農業社会から工業化社会への転換ということである」^[17]という。それが「都市化の進展と急速に経済が発展した台湾社会において、人々の文化意識の側面でも著しい変化が現れた。国民党が推進した『中華文化』の復興をもくろむ政策にも影響されながら、台湾の人々をとらえたのである」^[18]と述べる。他方では、「現代の台湾の茶芸文化は 1970 年代中期から発展してきた。当時、国際経済危機、80 年以降の台湾ドルの値上げ、給料水準の上昇や、台湾茶の競争力が低下」^[19]により、そこで「台湾茶葉危機が発生し、外国洋行の台湾茶業からの撤退や台湾茶商らによる経営連携の失敗などによって、輸出産業としての台湾茶の競争力が弱められた」^[20]のだという。それで「輸出不振に直面した台湾は、茶葉輸出という『伝統』を手放し、台湾市場の開拓へと方向転換を試みる」^[21]という歴史をたどった。そのような事情が、台湾域内で茶の消費を促進し、茶文化を発展させた一つの要因とも考えられる。余舜徳は「元々輸出産業としての茶産業は、台湾国内で消費するために生産され、政府が国内で消費されるように促進し、茶葉改良の場で競争させるようになった。そして、芸術化された茶芸館をつくらせ、台湾の茶芸文化は過去の『老人茶』の伝承から、さまざまな美学要素の創造を試み、物質文化の要素も加え（茶道具の設計、茶花を取り入れる、茶席を設計する）、儀式的に品茶や展示会が行われるようになった」^[22]という。台湾政府は茶葉問題を解決するために、輸出品の茶を改めて芸術的に構築し、

新たな茶文化という形を創出するとともに、茶を扱う店では「茶芸」という概念を導入した。そして、「新たな事物を理想的に実現するため、大衆に向けた空間を作り、展示、継承、交流、培訓（教えること）とサービスを提供し、そしてそれを維持するよう、文化商品という経営方針を検討した。茶葉や茶道具の販売や品茶のために、文化交流を行い、サービスなどの新たな経営方式を創造し、『茶芸事業』あるいは『茶芸館業』を作り出した」^[23]のである。さらに「1983年11月19日に台湾經濟部が正式な法令を出し、台北市、高雄市と台湾省政府が茶芸館の設立を認め、正式的な法令を出され、茶芸、茶芸館が新たな職業になった」^[24]。その結果、1982年に台北市に10数軒の茶芸館がみられ、1987年には台湾全体で500軒以上の茶芸館が設けられ、東南アジアや中国にまで広まった^[25]。

つまり、台湾では茶葉の輸出不振に起因して、台湾政府が茶葉の国内消費を促したことで飲茶文化が創造された。そして、茶芸という概念が取り入れられたことよって、新たな茶文化が創出されたのである。

2. 中国大陸への伝播

中国における茶文化の発展過程は、台湾茶文化のそれとほぼ同じ道をたどった。特に、国内での茶葉消費を通じて、新たな飲茶文化が形成されたことはよく似ている。中国では、新たな国家を建設して、多民族を安定的に維持し、経済を復興させる中で、茶葉生産を促進したのである。中国政府は、まず茶園の栽培面積を拡大させ、大量生産された茶葉が工業を発展させた。茶葉を輸出することで、先進国から機械や設備を輸入することになった。つまり、中国政府は茶葉生産を通じて工業化を促進していたのである。新中国が成立したばかりの時期には、茶葉生産が国の発展に重要な役割を果たしたのである^[26]。

しかし、茶葉が大量生産され、「一九七〇年代末から茶葉生産量が年々増加する中で、流通が追いつかなくなかった結果、大量の茶葉が出荷できず、国家の倉庫に保管されたまま変質してしまうような事態に至ったことがあった」^[27]のである。そこで、中国政府はこうした茶葉問題の解決に向けて、「一九八四年六月になると、国務院が『茶葉の販売を拡大し、継続的な発展を促進する』ことを目的に、『茶葉の買付・政策の調整と流通体制の改革の意見に関する報告』^[28]を公布し、茶葉の流通体制の改革に着手した」^[29]。「経済発展を中心とした改革開放初期の一九八〇年代になされたこのような体制改革は、茶葉経済を市場経済に乗せて、継続的な発展を図ることを目指すものでもあった」^[30]という。「一九八五年以降、茶葉の国内市場の開放にともない、流通、販売システムも構築されるようになっていくのである」^[31]。そして、「一九八三年に『浙江杭州茶人之家』を成立した際、茶を淹れる点前を演じることになり、当時『茶礼培訓』と言われた」^[32]という。1990年代には茶芸という概念はまだなかったとも考えられる。

中国茶が国内市場に向けて茶文化を創造するにあたり、前述の台湾茶文化の成功事例を参考にした。中国がそれを受け入れるきっかけとなったのは、「一九八七年十一月より台湾同胞が中国の親戚を訪ねることが自由化され、兩岸の交流が再開された。それはちょうど中国で飲茶の習慣が回復し、茶が国民的な飲料になるとともに、飲茶を文化的なものへと昇華させることが模索されていた時期でもあった」^[33]のである。台湾同胞が中国の親戚を訪ねることがきっかけとなって、中国本土に茶芸という概念が導入された。陳文華は「茶芸という概念の創造と茶芸館業の形成は、台湾地区茶芸界による中国文化事業の重要な貢献の一つである」^[34]と指摘した。なお、茶芸

という概念が伝来する前に、中国では独自の飲茶方式があり、それを中国飲茶文化として外へ向けて発信してきた。

中国における最初の茶芸の第一人者は吳雅真である。吳雅真が詔安の茶人を訪ね「閩氏工夫茶泡茶程序」（福建工夫茶）を創造し、考案した点前が 18 通りとなった。そして、1989 年に福建地域を代表して「全国茶文化展示週」に参加し、台湾省代表団と交流した。1990 年には、第一回国際茶文化討論会で吳雅真が「中国茶道表演藝術家」を受賞した。「1998 年以後は、全国で茶芸館が白熱化し、東の山東省威海、西の新疆克拉玛依油田、南の海南島三亜、北の黒竜江佳木斯、省市にしろ、県にしろ、茶芸館が花開くように各地方で満開となった。21 世紀に入ってから、茶芸館の発展が著しくなった。茶芸館の内装はより洗練され、規模、面積は巨大化し、何千平方メートルという茶芸館が開店している（休業の店もある）」^[35]。そのような茶芸館の流行とともに、茶芸の教育も発展してきた。そして茶芸教育の発展も台湾の影響があった。

1988 年 6 月に、範増平が台湾茶界の代表として「台湾經濟文化訪問団」に参加して、初めて中国で茶芸ショーを行った。1988 年 7 月 9 日（上海「文汇报」が「台湾茶芸特使在上海」として取材）、それが中国での「茶芸」という語の初デビューである^[36]。つまり、中国「茶芸」の導入は茶芸ショーが行われた上海から始まり、それから広州、北京、浙江へ広まっていったのである。

1984 年から 1994 年にかけて、計画経済から市場経済へ進むとともに、国内消費茶と輸出茶の制度が大きく開放されたために、中国の茶産業は大きく発展した。1984 年 6 月、國務院の指示により、『商業部関与茶葉購銷政策和改革流通体制意見の報告』が出された。その中で、国内販売茶と輸出茶は全て開放し、経済区ごとに組織を分け、流通と開放市場を

明確にし、経営活動と茶葉の販売を拡大させていくことが明確に規定された^[37]。

また、前述したように 1987 年 11 月から自由化された、台湾人の里帰りをきっかけとして、中国より先に発展した台湾茶文化が伝来するとともに、台湾茶葉界と中国とが連携することで、中国茶業の発展が促進された。1989 年 4 月 13 日には、台湾から中国に里帰りした台湾製茶関係者と交流会を行い、互いに市場情報や茶業に対する希望を意見交換した。1990 年 6 月には、上海市台湾同胞会、大地文化社と茶文化交流が行われ、範増平が招待され茶芸ショーが披露された。1999 年 9 月 25、26 日には、広州荔湾区政府と広州茶芸樂園が国慶節に「西関茶芸活動巡礼」を行い、台湾、マカオの茶文化関係者が招待され、茶文化の写真、茶芸が披露され、体験茶会が催された^[38]。以上のことから、中国茶芸は、国内茶産業の促進と台湾との交流によって発展したことが分かる。

ただし、今日茶芸を教える先生たちにとり、茶芸という概念は台湾から伝来されたものであり、アイデンティティーの形成と強化に関わるものでもあるため、そこにはあまり触れたくないと考えている。例えば、ある茶芸師は「今やらないと中国茶は世界中に広がらないが、今なら遅くないでしょう」と述べている。茶芸を習う人や教える先生たちは、中国民族茶文化を生み出しているのである。特に海外と交流がある茶芸経験者は、中国茶は長い歴史を持っているが、日本茶道や韓国茶礼に比べ国際的にあまり存在感がないと感じており、そのことをとても残念に思っている。茶芸先生たちは、中国茶文化は悠久の歴史をもつものを強調することが多い。

中国では茶芸の発展により、茶芸師という新しい職業が登場する。1999 年には「国職業大典」に入る。これにより、国家労働局によって「茶芸師国家職業標準」が定められ^[39]、

およそ 1800 種類職業の一つになった。茶芸師の資格を取れば、茶館、茶芸館に就職することが可能となるのである。さらに、近年ではサービス業界で求められる人材として人気がある。ある調査によると、茶芸師資格を持っている人材や、茶館や茶芸館などで働いたことがある経験者は、就職あるいは転職の際に、採用率が一般的なサービス業の経験者より高いとされる。そのことに関して、人事部は「茶芸を習った人材や茶芸館で働いたことがある経験者は、一般的なサービス業で働く人材よりも礼儀が正しく、全体的にイメージもよい」²と述べている。特に、高級レストランでの採用は、茶芸師の資格を持っている求職者が優先採用されることがよくある。さらに、サービス業に従事するスタッフが教養として茶芸を習い、茶芸師の教育を受ける若者が増えている。現在、茶芸を習うことは、茶に関するだけでなく、礼儀作法も含まれていることが明白である。

Ⅲ. 青島における「茶芸」の受容と愛好者

茶芸を習うことは「2002 年現在、浙江以外の中国各地でも教育活動は行われている」^[40]とされ、経済的に発展した都市から始まった。青島で茶芸師のシステムが導入されたのは 2000 年以降のことである。青島の飲茶文化は、福建人が経営する茶店の影響を受けてから流行したものであり、青島の茶芸とその教育は南方の影響を受けていることは間違いないだろう。

青島での茶芸という概念の導入は、数人の人物によって試みられたようである。その中心となったのが邹先生である。「青島では茶を飲むが、正式な飲み方がないし、茶葉の良し悪しが全然分からない状態であり、正しい茶の飲み方、茶芸を教えたいという考えがあ

った。そこで、茶芸を教えられるように杭州へ免許を取りに行った」³と語っている。

青島における茶芸教育の空白を埋めるために、現在の青島茶芸協会の邹先生が自らの故郷である杭州へ茶芸を習いに行き、青島で教え始めたのであり、青島にとって茶芸は南からの「外来」であるといってもよい。邹先生が茶芸師を育成する学校を始めたのは 2003 年のことであり、当時の募集経緯は以下の通りであった。

「最初の募集は 2003 年の年末である。当時募集広告を出して、その募集広告は半島都市報と早報の両方に出した。第一回目は 2 名の生徒を募集し、そして自分の店の店員 6 名を合わせ、8 名の生徒で授業を始めたのが青島では初めて茶芸師の教育である。個人的に学校を作り、資格がなかったため、青島市労働局仁大技能学校と連合し、卒業証明書は青島市政府が認可している仁大技能学校のものを配ることになった」。

邹先生の学校は、2003 年に正式的な茶芸学校として設立された。そして、今日では青島での茶芸師試験問題と試験監督も邹先生が担当している。邹先生が自ら教えた経験を生かして、現代人の需要に応じて健康的な茶芸課程を設定し、例えば「七碗茶」、「泡茶課程」（茶を淹れること）、「品茶課程」（茶の滋味を味わうこと）、「茶養課程」（茶の飲用を通じて養生すること）、「尊生課程」（養生の思想を取り入れること）などの茶芸に関する課程を研究して作り出した。邹先生は、青島で人気のある茶芸師の先生として活躍している。さらに、国家資格以外にも邹先生が茶芸の学士、修士、博士課程まで作り出して、受講生を道教の修行の地として知られている茅山や嶗山の奥などに連れて行き、集中授業を行っている。また、邹先生が作った「二十

四節「嶗山尊生茶製造技芸」という課程は、
「山東省青島市嶗山区第六批区級非物質文化
遺産代表性項目名録」⁴推薦リストに登録され
た。さらに、2021年には青島市嶗山区にも培
訓基地を設立し、定期的に集中トレーニング
という茶芸教育を行っている。

茶芸師が青島に伝来した当初、受講生は地
元の嶗山茶を栽培している茶農家が少なく
なく、筆者が2010年に邹先生の学校へ習いに行
った時は地元の茶芸館、茶葉販売店の経営者
となる人も多く受講生していた。邹先生の受
講生の多くは、現在では嶗山茶の販売あるい
は茶に関する仕事に携わっている。嶗山茶の
栽培、生産、そして茶葉の販売に携わる人々
は茶に対する知識が足りず、正しい茶葉の淹
れ方も分からなかったために、茶芸に関する
知識を求めたのである。2005年時点では趣味
として習いに来る人はほとんどおらず、受講
生は仕事に役立たせるために茶芸を習いに来
ていたのであり、地元の嶗山茶の発展に貢献
したともいえる。

青島で本格的に茶芸師が注目を浴びるよう
になったのは、2010年前後のことである。LJ
茶芸師は「2012年の茶芸教育機関の生徒の6
割は嶗山茶の生産者や販売者であり、当時同
じクラスに通った同級生が茶葉の販売に携っ
ていた、茶芸館の経営者になっている」⁵と述
べている。現在、茶葉に関する仕事をしてい
る関係者は、ほぼ2000年頃に茶芸教育を受け
ていた受講生である。

1. 青島政府の政策－「安家落戸」

青島市政府は、多くの茶芸師を育てるよう
受講生に関する様々な政策を打ち出している。
いわば茶芸人材の育成を促進しているのであ
り、例えば高級技師茶芸師という資格を取れ
ば、博士や修士と同様に扱い、外来務工者は
三級茶芸師資格高級専門技術者の資格を取得
したら

青島市民になれるのである。それは「安家
落戸」という制度に当たり、2018年12月に、
青島市政府が打ち出した「高級専門技術資格
を持っていれば、高級人材として青島市民に
なれる」という新政策である。外来者が相当
な学歴あるいは技術資格を取れば青島市民に
なれるということであり、いわば外来者がと
ても容易に青島人になれるという政策である。

茶芸師という資格で青島市民になるのは外
来務工者が多くを占めている。高学歴ではな
い外来務工者は早く都市で仕事を見つけるた
めに、茶芸を習って茶芸師という資格を取っ
て就職することを考えたのである。張さん⁶の
インタビューによれば、彼女は農村から都市
に出稼ぎに来たが、学歴がないために、レス
トランのスタッフとして就職したという。友人
から「茶芸師という資格を習い行ったら簡
単に今よりよい仕事を見つけられる」⁷と勧め
られた。張さんが仕事の合間を利用して茶芸
師という資格を取ってから、順調に茶芸館
で働くことができた。そして高級茶芸師の資
格で青島市民になり、子供の入学問題を解決
した。

吴建華は「茶芸師は専門性が高く、多くの
専門学校は人材市場の需要を受けて、茶芸、
茶学などの課程を設置し、職業としての茶芸
師を育てている。茶芸師は短時間で取得する
ことができるため、就職しやすいなどの特徴
があり、多くの若い世代で注目されている」
[41]と指摘した。

筆者が長年調査してきた対象者LJさんも、
2001年から青島市に住み始め、夫婦両方が外
来者であった。そこでLJさんは、2005年に
高級茶芸師資格を取得して「安家落戸」に応
じて、高度人材として2019年に青島市民とな
った。青島市民でなければ、子供を国立幼稚
園させることができなかったが、自宅近くの
幼稚園に入園させることができた⁸。

外来者にとって茶芸師という資格は、青島市で就職できるだけでなく、よりよい条件の仕事に就くことが可能となり、張さんと LJ さんの事例から分かったのは、本人やその子供の将来に関わるということである。

また、青島市政府は、下岗职工（失業した従業員）が茶芸を習い、資格を取れば、学費を一部免除する制度を打ち出した。さらに、失業者が自由に新たな職業を選ぶことができるように、無料体験から始め、資格取得後に再び就職できるよう支援している。市政府は失業者に対して資格取得のための補助金制度まで用意し、初級は 1000 元、中級は 1500 元、そして高級は 2000 元の補助金を支給している（表 1）。

補助標準
初級（五級）評茶員／茶芸師を取得，1000RMB.
中級（四級）評茶員／茶芸師を取得，1500RMB.
高級（三級）評茶員／茶芸師を取得，2000RMB.

表 1：評茶員・茶芸師の補助制度

出所：青島市人力資源と社会保証(2021 年)

その政策により、資格を求める人々が増え、資格を与える教育機関は、試験に合格させるように、試験問題集を取り入れた。表 1 の評茶員の場合、練習問題集を受講生に配り、早く資格を取得するために、大量の練習問題集で練習させる。しかし、練習問題集が中心では、茶を勉強する上で足りない部分があるため、茶の本質を考えながらカリキュラムを作り、教える側もさらなる知識と経験が必要である。生徒側にも問題があるが、学校側が国の補助制度を利用してできるだけ多くの生徒を集めることに興味を持っていることに問題がある。例えば、ある学校の募集広告を見ると、そのことがよく分かる。

再不考就没有机会了。现在学习茶艺还可以申领3000元技能补贴，最后一批考试，证书国家终身认可，含金量飙升↑↑↑。

中级证书：落户加分、申领补贴、抵扣个税、买房还可以享受30%共享产权的政策。
30个课时茶艺课程，不仅可以学习到茶艺基础知识了解泡茶、品茶、辨茶、养生等各类知识，这是最后一次“免费学习”的机会了！抓紧机会！！！！

閉じる



図 1:青島ある学校の募集広告

出所：WECHAT から取得（使用許可を得た）

そこには「チャンスを逃がさないように、今茶芸を習うと、3000 元の補助金をもらえる。今年最後のチャンスだ」と書かれている。茶芸教育機関が政府の補助制度を利用して生徒を募集している。

茶葉市場の拡大にともない、専門的な知識を持つ人材が求められるようになった。とりわけ茶芸館や茶店などでは、茶葉知識を持った人材が必要になり、茶芸師の需要が高まっている。青島市内では、2010 年前後に多くの茶芸師を育てる学校が生まれた。例えば「国芸茶道」という茶芸学校が設立されたのは 2012 年であり、「国芸茶道」法人の陳先生は「当時青島市内には多くの茶芸館が生まれたため、茶芸師を育てることが青島市への貢献となる」⁹と述べている。

そして、「大紅袍賞全国茶芸電視大会」，「掌上乾坤」品茶賞収集交流会，「茶香春暖」市南区茶文化季などの茶芸活動が開催され、2014 年には「市内茶芸館地図」まで作られた。

「国芸茶道」の陳先生は、青島市の茶芸文化に多大な貢献をした人物である。もちろん学校の設立は、市政府の支持を得て実現した

ものであり、多くの補助金によりたくさんの受講生を集めることができた。いわば、行政が「安家落户」や補助金制度を整え、茶芸師教育が大きく発展し、青島茶芸に関する専門的な人材を育てられた。そして、茶芸の先生たちが茶という「伝統文化」符号を利用し、茶芸課程を作り出している。茶芸の先生たちは茶芸教育により、青島茶芸の発展に貢献しているのである。

2. 趣味、教養として茶芸—日常生活芸術化

龔永新は、「社会は進歩すればするほど、人間は文化に対する消費意識が高まり、茶文化に対する消費も同じことである」^[42]と指摘した。また「茶は嗜好品になりつつあり、娯楽へと変化している」^[43]という。茶葉消費市場の拡大により人材の需要が増えるとともに、茶芸師として就職する人が増えている。

青島市政府は様々な補助政策を出して、就職環境や待遇などの面を配慮しており、特に外来務工者にとって魅力的である。つまり、茶芸師の収入は一般的なサラリーマンとほぼ同じ水準であり、伝統文化にも関わる茶を扱う仕事は社会地位的も高く評価されている。茶芸館で働くのとレストランで働くのとでは、社会の評価は天と地の違いがある。

2010年前後の青島市では、茶芸師資格取得を目的に茶芸を習う外来者の数がピークに達した。いわば、就職するために茶芸師という資格を取得するのである。宓戸佳織が中国杭州で行った調査によれば、「1990年代半ばまで、茶芸師資格がないものでも、茶芸館などにおいて客の目の前で茶芸を披露する『小姐』（原義は『若い女性』）や茶芸館の経営者『老板』になることができた。しかし2000年以降、『小姐』や『老板』になる場合、一般的な傾向として茶芸師の資格を持つことが望ましいとされるようになった」^[44]と述べている。青島は杭州より茶芸教育の普及が遅れたが、青

島においては飲茶文化が広まるにつれて、茶芸館に就職しているスタッフは茶芸師という資格を持つのは一般的なことになった。

近年では、就職より副業の手段として、あるいは教養として茶芸を習いに来る人や、趣味として習いにくる人が増えている傾向が見受けられる。牟先生（女性、40代、茶芸師）によると「2016年頃から、青年から中年の女性が増えている。最初に先生になった時期は（2005年）、若い人（就職する外来務工者のことである）が資格を取るため習いに来ることが多かったが、近年では教養、趣味として習いにくる人が徐々に増えている」¹⁰という。また、現在日系企業に勤めている尊生茶茶道博士をとった尹さん¹¹は、「日本に三年間留学した経験があり、海外に行って自国文化が分からなかったら交流さえできないことを味わった。現在外資系企業に勤めているから、伝統文化の茶芸を習ったらいつか使えるかも」¹²と語った。また晨哥暮曲¹³は、「2012年頃は、資格を取って就職するために習いに来る生徒が多く、特に嶗山区で嶗山茶を営んでいる人（茶二代）が多かった。また、茶葉の販売店、茶館、茶芸館で働いている人（経営者）も多かったが、2017年頃からは趣味として習いに来る人が増えている傾向がある」と述べている。そして、特に「40代の女性が多く占めている」と語った。

さらに、ストレス発散のために茶芸を習いに来る人も少なくない。「車や家のローンなどのストレスを発散するために習いにくる人もいる」、「今資格を取るというより飲茶に対する基本的な知識が分かれば、社交しやすくなるため」、「茶に関する知識があれば、仕事に役立つ」、「茶芸を習ったら礼儀作法も知ることができた」¹⁴という意見もある。LJ茶芸師は「偶然に茶と出会い、茶盲（茶に対する知識がゼロという意味）から茶芸師になった。この5年間は、茶は仕事であり、趣

味でもある」と語る。生徒や茶芸師の先生の話から、茶芸を習う目的は就職から趣味に変わる傾向が見受けられる。

現在の都市市民が茶芸を習う目的は、資格を取って就職しやすくするということもあるが、それだけではなく、茶文化の普及により茶を美味しく淹れることや、社交的な手段として、また個人の礼儀作法を訓練することを目的とする傾向があり、「動作」などの身体的な習い事が中心になっている。XJ（女性、1980年代生まれ、サラリーマン）は、「茶を習ってから、姿勢がよくなった」¹⁵と語っている。

調査中に会った茶芸を習いにやって来る人は女性が圧倒的に多かったが、その大半が結婚し、子供は自立し、安定的な生活を送っている。例えば、XJT（女性、1970年代生まれ、外資系企業の人事担当者）は、「子供が大学を卒業し、就職もできたから、今は一人の時間もある。自分は子供時代に何も習った経験がなかったし、茶をよく飲んでいるし、何か自分のことを思って……茶芸を始めた」¹⁶と語った。このように、茶芸を習う女性が少なくない。

女性が仕事以外に個人的な趣味を持つように、「子供が独立し、夫も自分の趣味もあるし、周りの人も茶を習っているから、自分もやってみよう」と思ったという人もいる。こうして茶芸を習いに来る女性は、すでに家庭の役目を全部果たし、これから自分のために、何かをしようという考えがきっかけになることが多い。そして、茶の習い事は、「楽器、絵などより門坎低（やりやすいから）、ただ茶を淹れて飲めばよい」¹⁷と考えられている。舒韵は「茶芸を習ってから、毎日茶を楽しむのが詩情画意（理想的な生活を送ったようになった）」¹⁸であると語った。

ここで重要なのは、「詩情画意」の生活を送れるということと、茶芸は茶を淹れて飲む

だけではなく、茶芸を習うことで芸術的な生活をしようという気持ち、そして、自分のため何かをしようという考えが生じるということである。すなわち、「よい自分と出会いたい」、「理想の生活を送りたい」という気持が、茶芸を習いにやって来る動機なのである。「今は、茶の習うことを通じて中国茶の歴史や文化を感じます。悠久の茶文化を持っていること知り、それを知りながらもっと習いたくなり、茶の深さが初めて分かりました。勉強を始めたところですよ」と語って習いに来た人にもいる。

ここで注目したいのは、市民が精神的なことを追い求める余裕があり、時間的な余裕があれば新たなことを勉強しようという行動を選択できるということである。物質的かつ時間的に豊かになれば、多様で理想的な生活を求められる。前述の女性は「自分は子供時代に何も習った経験がなかった……現在では、時間的に、金銭的にその余裕があるから、茶芸を習った」¹⁹と語った。それは女性だけではなく男性も同じであろう。

それは、その年代の人たちが生きてきた社会的状況と関わる。60、70年代に生まれた人たちが、十分な教育や豊かな生活を送れるようになったのは改革開放以降のことである。つまり、それまでの時代には趣味としての習い事の時間がなかったのであり、やっと時間的、経済的に「詩情画意」の理想の生活が送れるようになった。子供が独立し、もっぱら自分のために理想的な生活、勉強を追求することができるようになったのである。

今日の茶芸を、趣味あるいは教養ととらえることもできる。つまり勉強ブームということである。2013年に設立された康成女院²⁰へ習いにやって来る女性にインタビューしたところ、「現在では女性でも、趣味ぐらいなければいけないとか勉強しなければいけない」という考え方の女性が多くいることが分かつ

た。「ここに来たら、自分も勉強しようという気持ちが生まれた」とか、「ここは勉強を促す場だった」とか、「周りの人々が勉強しているから危機を感じる」という声を、調査地の康成女院だけではなく、茶芸教育機関でもよく聞いた。

つまり、現在の都市市民にとって、高度経済成長期とともに、人間の間で競争が激しくなり、個人の勉強志向が強くなる。前述したような焦りの気持ちは「資格というものが何もないから」、「車の免許以外何ももっていないから」、「周りの友人が習っているから」、「資格社会だから」に由来するのであろう。このような観念は、中国の都市で生活をしている人々が持っているし、周りの人がそれぞれ新たなことを始めているために、自分が何もしないと、不安や焦りという危機感がどんどん増し、とりあえず趣味を始めてみようということになる。

なぜ、茶芸を習い事として選択するのであろうか。中国人にとって茶は生活に欠かせないものであり、中国は茶文化の長い歴史を誇っている。さらに、理想的な都市生活を送るために、あるいは健康的な生活を送るために、飲茶は健康的で美容効果もあることなどをマスメディアが広く宣伝している。そうした社会的背景から、茶は伝統の符号を持っているのであり、茶芸を習うことで、健康的な、優雅な生活を送ることができると考えられている。現代中国では茶芸を習い生活品質を上げるという考え方が支持されるとともに、市民の間で「社会規範」や「礼義作法」という考え方が認識され、そのことが趣味活動を選択する上で影響を及ぼしていると考えられる。

つまり、茶芸を習うということは茶を淹れることだけではなく、茶に関する知識も勉強することであり、またその修得を通じて芸術的な生活を追求することでもあり、さらに個

人的な「礼義作法」を身につけることにもつながる。

さらに、現在の茶芸は道具の整理術、物の飾り方、掃除術など、個人から家庭まで影響を及ぼしている。LJ は、「茶を習ってから、家を綺麗にする気持ちがわいてきた」、XJT は「美しいものが好きになった、雰囲気を感じるようになった、家を綺麗にしたいくなった」などと語った。それは「日常生活に役立つことばかりだ」²¹と語る茶芸師もいる。その一つ一つに細心の注意を払い工夫することが、新たな時代の都市人の日常生活や社会生活などに影響を及ぼすのである。

茶芸という習い事は、現代市民にとっては資格をとる目的以外に、趣味や教養を目的とする生徒が増えており、青島市では茶芸は徐々に都市住民の日常生活に浸透し、理想的な生活あるいは優雅な生活を送る人々を受けていれている。つまり、茶芸教育は現在の都市住民にとって、就職資格、趣味、教養として様々な段階があるが、彼らのそれに対する認識をみると、茶芸を通して中国人の生活に「生活革命」が生じているのは明らかである。そして茶芸を習いにやって来る人の声から、周星が「生活革命」を提唱した時点より、日常的な物質的な面から非日常的な精神の面へ変化してきたといえ、新たな「生活革命」の段階に入ったとみてよいだろう。

IV. おわりに

本稿では、中国への茶芸という概念の伝来と、青島市を事例に都市住民の生活にそれが浸透する過程について考察した。茶芸という概念は中国政府により、新たな就職資格とされ、たくさんの優遇措置を打ち出して茶芸の発展と普及を促進してきた。

青島における茶芸の発展はいくつかの段階を経てきた。現在の茶芸は、中国における経

済発展を背景に、人々の日常生活に浸透し、物質面だけでなく精神面を満たすものである。また、茶芸を習う目的も、就職のためから趣味へと変化した。つまり、生活品質を上げるとして習うようになった。特に今日に茶芸を習うことは、生活品質を上げるために茶芸を習おうと考えている都市住民が増えている。

脚注 *

- ¹ 愛知大学中国研究科博士課程後期研究生。
本稿は愛知大学国際研究センター若手研究
助成の研究成果である。
- ² 2019年12月27日にインタビューした内容で
ある（場所：如是書店茶室）。
- ³ 2019年12月27日にインタビューした内容で
ある（場所：培訓学校青島国際会展センタ
ー）。
- ⁴ 嶗山区文化和旅游局『嶗山区文化和旅游局関
于公示第六批区級非物質文化遺産代表性項
目名錄推薦名單的公告』[http://www.laoshan.g
ov.cn](http://www.laoshan.gov.cn)（検索日2021/03/29）。
- ⁵ 2021年インタビューした内容である
（WECHATによる）。
- ⁶ 茶葉店の経営者であり（女性、1986年に生
まれ）、2005年に河南から青島に仕事を探
しきた。茶芸師資格試験を受けて、茶芸館で
働いた経験もある。
- ⁷ 2019年7月23日に張さんインタビューした
内容（場所：人在草木間茶店）。
- ⁸ 2019年12月28日インタビューした内容であ
る。（場所：香山小舎茶芸館）LJ茶芸師は、
2019年2月上旬に手続きをして、2月末に青
島市民になった。審査資料は、社会保険証、
茶芸師証明書、房産証（不動産登記簿）が必
要である。

- ⁹ 2020年4月8日のインタビューした内容であ
る（WECHATによる）。
- ¹⁰ 2019年8月31日にインタビュー内容である（場
所：如是書店茶室）。
- ¹¹ 茶芸師であり（女性、1980年代生まれ）、2020
年青島茶博会、嶗山茶の茶芸を表演した。
- ¹² 2020年8月インタビューした内容である
（WECHATによる）。
- ¹³ 茶友会の元会長であり（男性、1960年代生ま
れ、定年退職）、茶芸師の先生でもあり、2019
年から茶芸館を経営している。
- ¹⁴ 2021年4月6日にインタビューした内容
（WECHATによる）。
- ¹⁵ 2021年5月8日にインタビューした内容
（WECHATによる）。
- ¹⁶ 2021年5月8日にインタビューした内容
（WECHATによる）。
- ¹⁷ 2021年5月8日にインタビューした内容
（WECHATによる）。
- ¹⁸ 2020年7月28日にインタビューした内容
（場所：蓮花閣茶芸館）。
- ¹⁹ 2021年5月8日にインタビューした内容
（WECHATによる）。
- ²⁰ 成人教育学校である。主に趣味としての茶、花
などの習い機関でもある。
- ²¹ 2021年8月26と5月8日にインタビューし
た内容（WECHATによる）。

*参考文献

- [1] 王俊暉:『論中国茶文化研究跨学科趋势』、『農
業考古』,2012年,51頁。
- [2] 王静:『現代中国茶文化考』,思文閣出版,2017
年,109頁。
- [3] 阮浩耕:『品茶:中華茶文化』,杭州:杭州出
版社,2005年,5頁。

- [4] 余悦:「新興職業茶芸国家認定 10 年与未来走向-在重庆白葵原茶芸館的演講」, 2010 年, 150 頁.
- [5] 範增平:「台湾的茶芸文化」,『農業考古』, 2003 年, 292 頁.
- [6] 範春梅:「闽台茶文化交流合作現狀、对比分析發展对策」,福建農林大学專業修士學位論文, 2014 年, 12 頁.
- [7] 範增平:「台湾的茶芸文化」,『農業考古』, 2003 年, 292~293 頁.
- [8] 孟祥梅:『中日茶文化の相違点から見る日本茶道文化の特徴』,2007 年山東師範大学修士學位論文第 15-16 頁, 轉載範增平:『茶文化的伝播对現代台湾社会的影響』, 1992 年, 『農業考古』, 7 頁.
- [9] 孟祥梅:『中日茶文化の相違点から見る日本茶道文化の特徴』,2007 年山東師範大学修士學位論文第 15-16 頁,轉載季野:「茶芸信箱」、『台湾茶与芸術雜誌社』, 1998 年, 98 頁.
- [10] 陳宗懋(主編),『中国茶葉大辞典』,中国輕工業出版社, 2015 年, 576 頁.
- [11] 宍戸佳織:「中国茶文化と茶館-中国浙江省杭州市の事例-」,早稲田大学大学院博士学位論文, 2006 年, 37 頁.
- [12] 朱紅纓:「雅集茶会的沿革及現代性」,『茶葉』, 2014 年, 104 頁.
- [13] 周本男, 範增平:「茶道、茶芸、茶文化的来龍去脉-範增平接受陆留弟訪談記錄」,『農業考古』, 2011 年, 292 頁.
- [14] 王玲:『中国茶文化』,中国書店, 1992 年, 292 頁.
- [15] 孟祥梅:『中日茶文化の相違点から見る日本茶道文化の特徴』,山東師範大学修士學位論文, 2007 年, 14 頁.
- [16] 王静:『現代中国茶文化考』,思文閣出版, 2017 年, 88 頁.
- [17] 王静:『現代中国茶文化考』,思文閣出版, 2017 年, 89 頁.
- [18] 王静:『現代中国茶文化考』,思文閣出版, 2017 年, 90 頁.
- [19] 許賢瑤:『台湾包種茶論集』,台北樂学書局, 2005 年 vi、轉載余舜德:「身体修練与文化学習:以学茶為例」,台湾人類學刊 7 (2), 2009 年, 第 57 頁.
- [20] 範增平:「台湾茶業發展史」,『台北市茶商業同業工会』, 1992 年, 74~75 頁, 轉載王静:『現代中国茶文化考』, 思文閣出版, 2017 年, 96 頁.
- [21] 王静:『現代中国茶文化考』, 思文閣出版, 2017 年, 96 頁.
- [22] 余舜德:「身体修練与文化学習:以学茶為例」,『台湾人類學刊』, 7 (2) 2009 年, 58 頁.
- [23] 範增平:「台湾的茶芸文化」,『農業考古』, 2003 年, 292~293 頁.
- [24] 範增平:「認識茶芸館」,『農業考古』, 2000 年, 174 頁.
- [25] 同上.
- [26] 王静:『現代中国茶文化考』, 思文閣出版, 2017 年, 18-39 頁.
- [27] 王静:『現代中国茶文化考』, 思文閣出版, 2017 年, 轉載『人民日報』, 1984 年 9 日.
- [28] 王静:『現代中国茶文化考』, 思文閣出版, 2017 年, 轉載「關於調整茶葉購銷政策和改革流通体制意見的報告」(國務院、1984 年第 75 号文件).
- [29] 王静:『現代中国茶文化考』, 思文閣出版, 2017 年, 59 頁.
- [30] 同上.
- [31] 王静:『現代中国茶文化考』, 思文閣出版, 2017 年, 60 頁.
- [32] 余悦:「中国茶芸的過去、現在と未来-為中韩茶文化交流会而作」,『農業考古』, 2002 年, 12 頁.

- [33] 王静:『現代中国茶文化考』,思文閣出版,2017年,116頁.
- [34] 陳文華:「論当前茶芸表演中的一些問題」,『農業考古』,2001年,12頁.
- [35] 陳文華:「中国茶芸館往何处去?—中国茶芸館三十年反思」,『農業考古』,2010年,79頁.
- [36] 周本男、範增平:「茶道、茶芸、茶文化的来龍去脉—範增平接受陆留弟訪談記錄」,『農業考古』,2011年,291頁.
- [37] 張琳潔:「現代茶文化現象研究」,浙江大学修士學位論文,2004年,24頁轉載蘇祝成、王岳飛,2001年.
- [38] 丁俊之:「茶飘香齐共享—広州茶文化迈向新世紀」,『上海国際茶文化節論部集』,2000年,63頁
- [39] 余悦:「中国茶芸的過去、現在と未来—為中韩茶文化交流会而作」,『農業考古』,2002年,13頁.
- [40] 宍戸佳織:「中国茶文化和茶館—中国浙江省杭州市の事例—」,早稲田大学大学院博士学位論文,2006年,52頁.
- [41] 吴建華:「茶芸表演过度“包装”引發的思考」,『茶艺創作』,2018年,113頁.
- [42] 龔永新:「对茶文化消費的規律性認識」,『産業与科技論壇』,2009年,30頁.
- [43] 関劍平:『茶与中国文化』北京:人民出版社,2001年,52頁.
- [44] 宍戸佳織:「中国茶文化和茶館—中国浙江省杭州市の事例—」,早稲田大学大学院博士学位論文,2006年,50頁.(小姐、老板の読み方を削除した)